

月刊

いじろのとも

第七卷

六月号

グリコのおまけ

解脱は

グリコのおまけ

解脱するもよし

解脱しないもよし

おまけを

もらうために

グリコを

買う

修行は

それ自身のために

ひたすら

するもの

家族の個の主張

家族のみんなが

個を主張すれば

家庭は崩壊する

人生を考え直して

みたい人は(三〇)

『聖書』解説(六)

マタイ福音書の第五章を続けます。

八心のきよい者は幸いです。その人は神を見るからです。

この節は、キリスト教徒にとって結構むずかしいようです。私が、はじめてこの「山上の垂訓」の解説書として読んだ、黒崎幸吉著『山上の垂訓講義』(一粒社、昭和三年刊行)によりますと、ドイツで宗教改革を行ったルター(一四八三—一五四六)も、その著『山上の垂訓の注解』で、この一節はある意味において難解であると言っているそうです。

その理由ですが、黒崎は聖書の、「原罪」の記述や、「義人はいない、ひとりもない(ローマ人への手紙三—一八)」や「いまだかつて神を見たものはいない(ヨハネ—一八)」などの記述をあげて、これまで「人の心の清きこと、および人が神を見ることは、共に不可能

なことであるように教える場合が非常に多いからである」と述べています。

つまり、キリスト教では、人は原罪を背負っていて、心の清いものも、神を見たものも、いないとされているのです。なのに、ここでは、「心のきよい者は幸いです。その人は神を見るからです。」と言っているというわけです。

でも、私にとっては、この節はとても分かりやすいものですし、これは、実に、宗教の本質をずばり言い当てているように思えるのです。

なぜなのか。順次みていきたいと思います。

はじめに「こころが清い」とはどんなことなのか、検討します。

私は、かつて、本誌『こころのとも』第二巻(平成三年)二月号の自作随筆選の欄で「新しい呼び名」と題する随筆を載せました。お持ちの方は、取り出して見て頂きたいのですが、お持ちでない方や、すぐ取り出せない方も多いと思いますので、その抜粋をここに紹介しておきます。長くなりますが、とても関連が深いと思いますので、かなりの部分を再掲します。

人は生まれた時は、とても「清らかなこころ」をもつ

ていると、私は思うのです。無条件に人に「こころ」を向けていると思うのです。そのことは、最近の発達心理学の研究からも明らかになってきていることなのです。

ところが、成長するにつれ「からだ」でだんだんと自由に行動が出来だし、「あたま」で考えることが出来るようになりますと、「こころ」は人に向くのではなく、自分へと向かうようになってきます。それを発達と呼んでいるわけですが、しかしそれは、こころの清らかさという面から言えば、逆にそれを失っているとも言えるわけです。ですからあたまやからだは自由になるほど、こころも自由になるような躰けや教育がいらいます。そうしないと、どんどんこころに垢がたまつて、人の心が感じられなくなってくるのです。それなのに、いま日本人は、そのことに気付いていませんし、そうした教育はしていません。

ですから、いわゆる「あたま」の発達が普通の人と比べて遅れている子どもたちは、「こころ」の汚れが相対的に少ないと言えると思うのです。実際に接してみても、それはよくわかることです。

私は、この子たちの呼び名を、この良いところを捉えて付けたいと思うのです。それを「清心児」あるいは「清心者」としたいと思うのです。いかがでしょうか。

いまも世界中で戦争や紛争が絶えません。世界中の人が名利を追求し、弱肉強食は、動物の世界とあまり変わらないほど、蔓延しています。「適応」という言葉でそれを正当化さえしているように思われてしかたありません。人は本当に人の心を感じるこころもっているのかとさえ、疑いたくなってきました。

いま人が失いかけている、この「清らかなこころ」や「人の心を感じるこころ」を取り戻す契機となれるのは、知能の発達は進まないが、そうしたこころをもった子どもたちだと思ふのです。

いま世界中の人が目指すべき価値は「清心者」となることだと言えないでしょうか。

仏教には、「心性本淨 客塵煩惱」という言葉があります。「こころはもともと清らかなものなのです。それが、客観の世界の塵によって汚されています。塵を払って、こころを清らかにするとき、あらゆる本当の宗教が目指す、絶対者（如来）との一体感を得ることが出来ます。絶対者です。

この随筆を読んで頂きますと、ほとんど本節の説明はいらぬように思えます。

この随筆からもお分かりだと思いますが、こころの清

いものとは、自己への執らわれのない人のことなのです。ここに自己への執らわれの垢を付けていない人のことなのです。

私のモデルで言いますと、自己と他己のバランスのとれた人のことなのです。他己の働きが自己への執らわれによって阻害されていない人のことなのです。

私たちは、自己への執らわれがありますと、他人の痛みや喜びが、そのままに感じられなくなってきました。ひとの喜びは我が腹立ちとなり、ひとの痛みは我が快感となったりするのです。

そう感じますと、いくらその気持ちを隠そうとしても、それは自然に「気」となってしまうからだから発散し、相手に伝わってしまいます。そうなりますと、当然、人間関係は悪くなっていきます。

では、発達することによって付けてしまうこの垢は、どうやれば落とすことができるのでしょうか。宗教にとつてこれは極めて重要なことです。

実はこの「こころを清くする方法」のことをキリスト教ではおろそかにして来たのではないかと思われます。釈尊が五〇年にも及んで布教活動したのとは対照的に、キリストは、布教活動をはじめて間もなく、若年で死んでしまいました。このことが、この方法の未確立に係

しているように思えるのです。と言いますのは、若年で死んだために、釈尊と違い、キリストを真に理解できるような、よい弟子を育てることができなかったからなのです。

いつか解説することがあると思いますが、あまり先走りはしたくないのですが、関連がありますので、キリストが、確かにこの「こころを清くし、神の国を実現すること」についても述べていることを取り上げておきたいのです。それは、この「山上の垂訓」の中に含まれています。第六章の六節です。次にあげるのがそれです。

「あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋にはいりなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見られるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。」

また、祈る内容の一つとして第六章一〇節に次のようにあります。

「御国が来ますように。みこころが、天で行なわれるように地でも行なわれますように。」

これらの記述はとても大切です。祈る方法とその目的が書かれているからです。それは、自分の奥まった部屋で戸を閉め、一人静かに、わが心の中に神の国が来ますように、と祈るということです。

達磨大師は、面壁八年、解脱に至りました。一人静かに坐禅し、祈ること八年にして、やっと解脱できた、つまり、わがごころに神の国を実現できたのです。キリスト教徒にして、これほどまでに祈る人がいたのかどうか、あるいはいるのかどうか、私は寡聞にして知りません。カトリック教の厳しい修道院では、こうした祈りが行われていた、あるいは行なわれているのかもしれないとは思いますが、でも、もしいたとすれば、もっとキリスト教も立派な宗教に発展していたことだと思えますが。

最後に、「その人は神を見るからです。」の「神を見る」とはどんなことなのでしょうか。

私が入手して読んだ解説書によりますと、それは、神としてのキリストを仰ぎ見ることや、死後に神の国を見るというもので、現在の自分の心の中に神を見たとしたものはありませんでした。私は、既に述べましたように、神を見るのは、いま生きている自分の心の中でのことであると思うのです。

かつて本誌に載せた随筆を紹介したところでも述べましたように、「塵を払って、ごころを清らかにするとき、あらゆる本当の宗教が目指す、絶対者（＝如来）との一体感を得ることができるとは、

ここに述べています「絶対者（＝如来）との一体感を

得ること」が、この節の言葉で言えば「神を見る」ということだと言ってもかまわないのです。

でも、この「神を見る」あるいは「絶対者（＝如来）との一体感を得る」体験は、実は、口でいっても分からないことです。体験したもののみが理解することができず、マンゴウを食べたことのない人にマンゴウの味を分らせることは不可能なのです。マンゴウのような食べ物には似たものがあるかも知れませんが、真実の神を見るという体験は、幻想や幻覚のようなものを似た体験と考えるかもしれませんが、それらとは極めて異質なものであるのです。いま、問題になっているオウム真理教のように、麻薬や幻覚剤を飲んで、「神を見る」体験をしたように感じることはできませんが、それは、真実のものからほど遠いものなのです。

真言密教の修法（お祈りの方法で、ヨーガの一種）は、仏との一体感を得るために周到に組み立てられた瞑想法です。そこでは、一体感を得ることを「入我我入」と呼び、また、入我我入することを即身成仏と呼びます。

キリスト教でも、今後、原理としてキリストの教えにたち返り、方法として仏教やヨーガなどの修行法を取り入れ、ごころを清めるために、ごころを磨き、自らのごころの中に神を見るよう、精進すべきだと思われれます。

自作詩短歌等選

能力の束

人間を能力の束と
考える立場は
動物と人間を
連続して捉えるのに
好都合である

その立場は
動物だけではなく
機械とも
連続を考える

過剰な規範性

いま
過剰な規範性をもつ
家庭の子が
少女売春に
走るといふ

過剰な規範性は
自己を育てない
他者に流されて
生きていく

煩惱の追求

いま
自己の追求
自己の生きている
あかしの追求が
自己の情動の追求
自己の煩惱の追求に
墮している

暗いところを探す

暗いところで
落としたものを
明るいところで
探している

己を知るとは
暗いところを
知るといふこと

過去未来すべて現在

道元は
只今ばかり
命は存するなり
と言った

私は
過去も
未来も
すべて現在なり
と言いたい

米長邦雄語録

将棋元名人米長邦雄氏が

言うには

囲碁に強くなる秘訣

は

囲碁が好きになること

と

囲碁の先生を尊敬すること
だと

それは

人生についても

学問についても

仕事についても

言えること

自作随筆選

障害は個性か

六月六日（木）の朝日新聞論壇欄に「障害は個性と考
えたい」と題して、総理府障害者施策推進本部担当室長
の小池将文という人が投稿していました。

題名に驚き、どうということかと、一気に読みました。
読んでみて、やっぱりこの政府の重要な地位にいる人自
身が「障害は個性と考えたい」と考えていることが分か
り、さらに驚きを深くしました。日本の障害児・者への

偏見や差別の解放が、まだまだ遠い先のことのように、
あらためて思えてきました。

この投稿は、どうも昨年暮れに刊行された『障害者白
書』に「障害を個性と考えるべき」とする記事を載せ、
それに批判があつたことに、責任者として答えるもの
ようです。

「障害は個性」と考えることを是とする論点として、
この考え方が「障害者を特別視しない障害者観」の一例
であり、「障害はない方がよい」「障害があるのは不
幸」とする多くの人のぬぐいがたい思い込みを乗り越え
る可能性をもつものであり、「障害は克服すべきもの」
「苦しくとも障害者はリハビリに励むべき」との一面
的な障害者観を見直す意義があるものとしています。

また、この考え方は、障害があっても人間として誇り
をもつて生きていきたい、という障害者の切実な願いの
中から生まれた主張であり、これは、プラス思考のしな
やかな発想だとしています。

結論として、こうした考え方は、障害をない方がよい
ものとの否定的にとらえるだけではなく、前向きに受け入
れる発想だとし、障害者を特別視する社会の意識を変え
ていく契機になるとしています。

しかし、私は、この投稿の中で述べられている考え方

が、あまりにも表面的な見方に過ぎないことに驚きを禁じえません。

まず、障害をどう見、どう考えるかですが、この投稿では、障害はない方がよい、障害があるのは不幸、とする多くの人のぬぐいがたい思い込みがあり、また、障害は克服すべきもの、苦しくとも障害者はリハビリに励むべき、という一面的な障害者観があるが、こうしたものは払拭すべきものとしていきます。

確かに、のような障害者観の払拭については私も、障害を障害児・者が個人で解決するのではなく社会が援助しなければならぬものと考えますので、賛成ですが、しかし、私は、の多くの人が障害があるよりもない方がよいと考える考え方に間違いがあるとは思いません。

親は誰でも、自分の子に障害がなく生まれてくることを願っています。そのために大人は努力しなければなりません。でも、だからと言って、生まれてきた障害児を人間として価値が低く否定的に考えることは、間違っていると思います。例えば、羊水検査で、いったん妊娠した子が障害をもっていると分かっていたからといって、中絶することがあつてはならないと思います。

どんな人間も、一人ひとりが個性的な存在です。障害児・者も、勿論、健常者と同様に個性的な存在なのです。

人間として、等しく尊重されなければなりません。

しかし、このことと投稿にあるように「障害は個性」だと考えることとは、似て非なるものです。

障害を表す言葉には、生理的損傷、能力的無力、社会的ハンデの三つが区別されています。前のものが後のものの原因となると考えられます。ですから、障害を最終的に障害たらしめるものは社会的ハンデだと言えるのです。ということは、生理的損傷や能力的無力があつても、社会的ハンデがなければ、それは障害と受け取らなくてもよいということになります。

そうなりますと、障害を障害たらしめるものは、最終的には社会の中にその原因があることになります。

ところで、「障害児・者」一人ひとりが人間として個性的な存在であると考えるのではなく、「障害」を個性と考えることは、社会的なハンデを個に解消することを意味します。社会的ハンデがなければ、身体的容姿の美醜などと同様に、障害と考える必要はありませんので、生理的損傷や能力的無力だけなら個性と考えてもよいのですが、社会的ハンデがあるのに、それを個性として捉えることは、障害という「社会的な問題」を個性という

「個の問題」に還元し、そこに解消させることになるのです。それは、障害者の社会的意味を喪失させることを

意味します。障害者の社会的ハンデが、個人的な問題として完全に解消されることなどあり得ませんので、社会的ハンデは社会的な援助でしか解決できないのです。実は、そうすることが、人間の本質的なあり方をも示しているのです。もう少し詳しく説明しませんと分かって頂けないと思いますが、このように、障害という社会的な問題までも個に還元・解消することは、現代社会が陥っている個人主義という落とし穴に落ち込んでいることを意味しているのです。

現在の個人主義のように、個性々と個を尊重することを第一に考えますと、人はだんだんと社会性（他己）を失い、お互いが疎になつて行きます。他者に無関心になつていくのです。そして、そうなるほど、人はお互いが愛を与え合うのではなく、お互いが愛を奪い合うようになつていくのです。障害を個性と考えることは、結局は、この他者への無関心と他者からの愛の争奪をもたらすものであり、人間として尊重されたいという障害者の願いとは逆の、マイナスの方向に向かつているのです。障害をもつて生まれることは、それだけ生きていく上で大きな社会的な負担（社会的圧迫感、養育負担感、不安感、発達期待感、養育探究心）を背負ったことを意味します。しかし、それを幸せにするか不幸にするかは、

私たち周囲の者・社会の人たちの考え方や生き方に関わってくるのです。

私たちは、障害をも個の問題として考えるような、結局は互いに無関心な、愛を奪い合うような、一層個人主義化した社会を指すのではなく、障害者をはじめ、子どもや老人や病人のような社会的な援助を求めている存在に対しては、「自己」を捨てても尽くそうとする、誰でもが社会に心を開いた、私の理論で言えば「他己」を十分働かす社会を実現しなければならぬのです。それが、障害を個性と考えるのではなく、障害者一人ひとりが個性的な人間として尊重されるということであり、また、障害者の社会的意味もそこにあるのです。

そして、こうした社会では、各自一人ひとりが自分を制して、他者を尊重する「ところ」をもたなければなりません。そのとき、たとえ誰かに障害があろうと、人の痛みを我が痛みとし、自分を犠牲にしても、他者のために「助けさせて頂いてありがたい」と思つて、援助することができなのです。また、障害者も「ところ」から、「助けて頂いてありがたい」と思つることができなのです。そうなれば、「障害は個性だ」などと言って、自己に閉じこもることはないのです。障害者として、堂々と社会にこころを開いていても、傷つくことはないのです。

釈尊のつとば（四七）

法句経解説

（一七〇）世の中は泡沫（うたかた）のごとしと見よ。世の中はかげろうのごとしと見よ。世の中をこのように観ずる人は、死王も彼を見ることがない。

なかなか深遠なことを言ってますので、結構むずかしいと思われます。

あまり使われなれないと思える言葉を解説しておきますと、「うたかた」とは、水の上に浮かぶ泡のことで、はかなく消えやすいことのとえに使います。また、「かげろう」とは、春のうららかな日に、野原などにゆらゆらと立ちのぼる気のこと、やはり、はかないもののとえに使われます。さらに、「死王」とは、人の死を司る閻魔大王ないし死神を意味します。

さて、この偈の言わんとするところですが、まずはじめに、世の中がはかないものであることを知れと言っています。仏教の言葉では、それは諸行無常と呼ばれています。「人間（精神）」のいのちだけではなくて、「生物（生命）」のいのちにも、「物質」のいのちにも、あらゆるこの世の存在に、いのちの限界があると言っている

のです。つまり、この世のあらゆるものが移り変わっていて、変わらないものは何一つないということです。

多くの人は、そんなことは、いまさら言われなくても分かり切っている、と言われるかもしれませんが。

でも、ここで大切なのは、「あたま」で「世の中をこのように観ずる」のではなく、腹の底から、心の奥底から「観ずる」のでなくてはならないのです。自分に引きつけて分かるのでなくてはならないのです。

自分の「生老病死」の問題、「四苦八苦」の問題として分かなければならないのです。

では、そう観ずれば、なぜ「死王も彼を見ることがない」のでしょうか。普通ではなかなか理解しがたいことです。実は、これは理屈では分からないことなのです。

まず、「死王も彼を見ることがない」という文の意味ですが、それは、あの世に住んでいる死王が見ないということですから、あの世に行かないということなのです。つまり、死なないということなのです。

この偈全体は、前半とを合わせますと、この世が諸行無常であると観ずれば、死ぬということがない、となります。これは、勿論、肉体的な死を言っているのではなく、ありません。精神が死を超えることを言っているのです。具体的に、私の感じとして言いますと、生死が自分にと

つてたいした問題ではなく、ということなのです。生きること執着しなくてもよくなるのです。自分に執着しなくてもよくなるのです。

多くの人は、一方的に自分が主体的に「生きている」とばかり思っています。実は、他方では客体的に「生かされている」のです。自分の思いや力を超えて、ただ生かされて生きているに過ぎないのです。

私たちが一方的に生きようとして自己の生を肯定すればするほど、私たちを超え、私たちを生かしている客体は、私たちに死として迫ってくるのです。

逆に、自己の生への執着を捨て、自己を否定し、私たちを生かしている客体にすべてをまかせて生きるとき、客体は死として迫るのではなく、「いま、ここに」ある生をどこまでも支えてくれる無限の肯定として現れてくるのです。

少しむずかしいかも知れませんが、それは、時間論で言えば、自己の生へ執らわれて「永遠の未来」まで生きることが望めば望むほど、自己の生きてきた過去が「瞬間の過去」として、空しく見えてしまうのです。あつという間に過ぎ去ってしまった「ゆめのまたゆめ」となってしまうのです。こうした人生を、「どれほど多くの人が送ってきたことでしょうか。」

自分の心に宿す「如来」さま、それはいま述べてきました客体・私の言葉では他己ですが、その客体・他己と自己が一体になるとき、私たちは時間を超えて、無限の過去から無限の未来に向かつて生きていると実感できるのです。自分の歳が仏さまと同じだと実感できるのです。それは、生死を超えていますので、死王が見ることがない境地だと言えるのです。

では、どうすれば他己と自己が一体となることができのでしょうか。幾度も言ってきたことですが、今後も言い続けると思いますが、そのためには、聖人の教えを信じて、ひたすら修行することが必要なのです。でも、それは、とても難しいことです。修行してもその効果があがっているのかどうか分からないままに、毎日まいにち、ただひたすら修行することほど難しいことはないのです。つい、「どれほど修行してもだめだから、地獄へ行くのだ」などと言って居直ったりしたくなります。でも、そこがこの世で悪を為すかどうかの瀬戸際です。居直った途端に、この世に悪を積むことになっているのです。自己に閉じることになっているのです。（現代では多くの人がそうなっています。）

私たちに拓かれた道は、聖人たちの教えを信じて、ただ、ひたすら修行するだけなのです。

後記

一、雨の少ない日が続いていましたが、梅雨になり、やっと恵みの雨が降りました。近所の田んぼでは、田植えの最中です。

二、お借りした畑では、毎日、春菊を収穫しています。水やりや増観さんのお墓にお参りしたついでに摘んできて、おひたしにしたり、汁の実にしたりしています。

三、大根もぼつぼつ収穫できそうです。最近、大根と人参のなますをよく食べますので、助かります。

四、畑には、新たに、ニンジン、ラディッシュ、ふだんそう、細ネギ、枝豆、いんげん豆、大根、ほうれん草、さつまいもなどを追加して植えました。

五、五月二四日（金）に、徳島県阿波町の同和教育推進協議会の研修会で講演させて頂きました。演題は「人権といじめ」でした。約六〇人ほどの方が熱心に、聞いて下さいました。

六、何人もの方が、新たに『こころのとも』の読者になって下さいました。

七、話の内容は、これまで人権教育が行われてきたのに、なぜ、人権をふみにじるようないじめがこれほど頻繁に起こるのか、いじめをなくするにはどうしたらよいのか、などについて考察しました。

八、もし、ご希望がありましたら、その時に作りましたレジメをお送りします。お申出ください。

九、梅の実が、市場に出てきはじめました。例年より遅いようです。今年も香川県大川町の「みろくふれあい市場」で今のところ七キロ買ってきて、梅酒にしました。平均の値段で一キロ一四〇円ほどです。

十、有り難いことに、この市場は野菜が特に安く、毎週日曜日まとめて買いに行きます。大根一本五〇円、キャベツ一個八〇円、カボチャ一個一〇〇円、といったぐあい、スーパーよりも三割から五割は安いと思います。これでは、お百姓さんが大変だと思ってしまう。

月刊 こころのとも 第七卷 六月号 (通巻 七十八号)	平成八年六月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>よしよ</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	